名古屋大学大学院医学系研究科

# 病理病態学講座
# 腫瘍病理学分野

## 教室の歴史

当教室の歴史は昭和14年に名古屋帝国大学の創立に伴って設置された旧病理学第二講座にさかのぼります。大島福造教授（初代教授/発がんウィルスによる家鶏肉腫の発生の研究）、田内久教授（昭和33年就任/肺がんおよび老化の研究）、星野宗光教授（昭和53年就任/電子顕微鏡を用いたがん病理およびマウス乳がんウィルスの研究）、松山睦司教授（平成元年就任/独自の胸腺腫発生ラットを用いた胸腺腫の研究）によって病理学研究の志と伝統が継承され、平成8年には先代の高橋雅英教授（名古屋大学名誉教授・現藤田医科大学）が就任しました。

高橋教授は1985年に自ら同定した*RET*がん遺伝子の機能解析を基軸に、がん関連遺伝子群による発がん機構や神経系の発生に関する研究を展開しました。本研究は多発性内分泌腫瘍症2型やヒルシュスプルング病等の病態解明にもつながっています。当教室の現在の研究プロジェクトもRET下流のシグナル伝達機構の研究から発展した内容となっています。

教室からは牛島宥（名古屋大学名誉教授）、田村潤（国立名古屋病院名誉院長）、長与健夫（愛知県がんセンター名誉総長）、小島清秀（名古屋大学名誉教授）、竹内純（名古屋大学名誉教授）、佐賀信介（愛知医科大学元医学部長）、社本幹博（藤田医科大学名誉教授）、筒井祥博（浜松医科大学名誉教授）、中島伸夫（名古屋大学名誉教授）、横井豊治（名古屋大学元教授）、岩下寿秀（浜松医科大学）、市原正智（中部大学）、村雲芳樹（北里大学）、黒川景（愛知県立大学）、下山芳江（名古屋大学医学部附属病院病理部）、村上秀樹（愛知医科大学）、浅井直也（藤田医科大学）、榎本篤（名古屋大学）などの多くの病理学研究者が輩出しています（敬称略）。また当教室で学位を取得した多くの病理医が中部地区を中心とした基幹病院で病理診断業務および地域医療に貢献しています。

## 髙橋 雅英

たかはし まさひで

**平成8年就任（1996～2020年）**

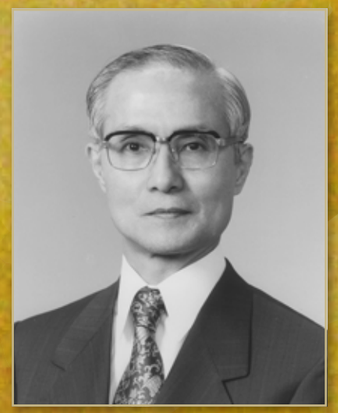
| | |
|---|---|
| 1954年11月18日 | 岐阜県に生まれる |
| 1973年3月 | 私立東海高等学校 卒業 |
| 1979年3月 | 名古屋大学医学部 卒業 |
| 1983年3月 | 名古屋大学大学院医学研究科 修了 |
| 4月 | 米国ハーバード大学医学部 |
| | ダナファーバー癌研究所 Research Fellow |
| 1985年11月 | 愛知県がんセンター研究所病理学第二部 研究員 |
| 1990年4月 | 名古屋大学医学部病理学第二講座 助手 |
| 1991年1月 | 同上 講師 |
| 1995年6月 | 同上 助教授 |
| 1996年7月 | 同上 教授 |
| 2000年4月 | 名古屋大学大学院医学系研究科病理病態学講座 腫瘍病理学／神経機能病理学 教授 |
| 2003年4月 | 医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター センター長 |

1979年、当時の故星野宗光教授の誘いで病理学第二講座の大学院に入学。1983年、大学院を修了後、米国ハーバード大学医学部・ダナファーバー癌研究所のGeoffrey M. Cooper博士の研究室に留学、*RET*がん遺伝子のクローニングに成功する。帰国後、愛知県がんセンター研究員を経て名古屋大学病理学第二講座に助手として赴任し、松山睦司元教授のもとで若い研究者を率い、精力的にRETの機能解析に関する研究を展開する。1996年、病理学第二講座の教授に就任。1998年から5年間、文部省中核的研究拠点形成（COE）プログラム「神経変性疾患と悪性腫瘍の分子医学」のプロジェクトリーダーを努め、神経変性疾患と悪性腫瘍の病態解明から治療法の開発へ至る基礎と臨床の研究の統合を推進した。2012年4月より大学院医学系研究科長、医学部長（2017年3月まで）、2017年4月から名古屋大学理事・副総長（2020年3月まで）として医学部・医学系研究科、大学の発展に尽力する。2015年4月に第104回日本病理学会総会（会長）を名古屋で開催、2019年4月には第30回日本医学会総会（準備委員長）を開催した。日本病理学会理事、日本癌学会理事、日本病理学会英文誌「Pathology International」のEditor in Chief、日本癌学会英文誌「Cancer Science」のEditorなどを務め、学会の発展にも大きく貢献した。

［ 主な受賞歴 ］

日本病理学賞（2001年4月）、読売東海医学賞（2006年3月）、中日文化賞（2010年5月）、日本医師会医学賞（2019年11月）、高松宮妃癌研究基金学術賞（2020年2月）

第104回
日本病理学会総会
（名古屋国際会議場）



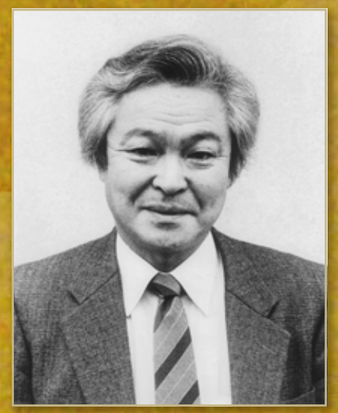
## 松山 睦司

まつやま むつし

**平成元年就任（1989～1996年）**

| | |
|---|---|
| 1933年4月24日 | 愛知県に生まれる |
| 1952年3月 | 愛知県立碧南高等学校 卒業 |
| 1958年3月 | 名古屋大学医学部 卒業 |
| 1959年7月 | 名古屋市立大学医学部第二病理学教室 助手 |
| 1964年4月 | オーストラリア学術会議 Selby Fellow |
| 1965年10月 | 名古屋市立大学医学部第二病理学教室 助手 |
| 1966年4月 | 愛知県がんセンター研究所病理学第一部 室長 |
| 1978年7月 | 愛知県がんセンター研究所超微形態学部 部長 |
| 1989年4月 | 名古屋大学医学部病理学第二講座 教授 |
| 1995年6月 | 同上 退職 |
| 1995年7月 | 藤田保健衛生大学医学部病理学第二講座 教授 |
| 2000年3月 | 同上 退職 |

名古屋大学医学部卒業後、名古屋市立大学医学部第二病理学教室にて長与健夫教授の下、主に発癌に関する研究を行い、その成果はNature、Science等の一流雑誌に多数掲載される。愛知県がんセンター時代には胸腺腫好発系ラット、BUF/Mnaの胸腺腫の病理組織学的、細胞学的研究を行い、胸腺腫の実験的研究の第一人者となる。名古屋大学病理学第二講座教授就任後は、BUF/Mnaラットを用いて、胸腺のサイズ、胸腺腫、筋萎縮および蛋白尿に関与する遺伝子のマッピングを行った。これらの研究は、名古屋大学教授退官後に大いに注目されることとなり、その後、BUF/Mnaラットを用いた胸腺腫、腎臓疾患研究は国内外への広がりを見せている。



## 星野 宗光

ほしの むねみつ

**昭和53年就任（1978～1989年）**

| | |
|---|---|
| 1932年1月15日 | 愛知県に生まれる |
| 1956年3月 | 名古屋大学医学部 卒業 |
| 1961年3月 | 名古屋大学大学院医学研究科 満了 |
| 1962年1月 | 名古屋大学医学部病理学第二講座 助手 |
| 1965年10月 | 名古屋大学医学部病理学第二講座 助教授 |
| 1966年4月 | 愛知県がんセンター研究所超微形態学部門 室長 |
| 1972年4月 | 米国MD Anderson癌研究所に留学 |
| 1973年5月 | 愛知県がんセンター研究所超微形態学部門 部長 |
| 1978年1月 | 名古屋大学医学部病理学第二講座 教授 |
| 1988年5月23日 | 逝去 |

病理学教室の大学院に入学するや、当時まだ一般的でなかった電子顕微鏡の技術を習得する。ラット腹水肝癌の微細構造を皮切りに、さまざまな癌細胞の微細構造の特徴を明らかにする。米国留学後は研究をマウス乳癌ウィルスによる発癌研究とその超微形態に関する研究に方向転換し、さらにモグラ目に属するスンクスに注目し、スンクスに自然発生した乳癌の培養細胞系を樹立。その中に新しいタイプのレトロウィルスを発見した。在任中、研究がまさに集大成の時期に入ろうとしていた矢先に急逝。勲三等瑞宝章

## 田内 久

たうち ひさし

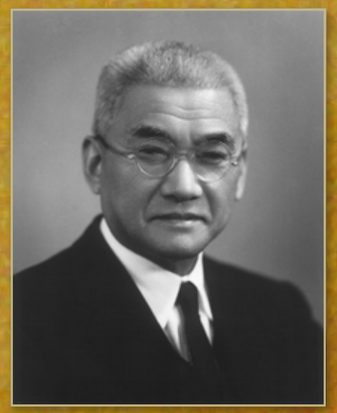
**昭和33年就任（1958～1978年）**

| | |
|---|---|
| 1914年10月13日 | 岐阜県に生まれる |
| 1937年 | 名古屋医科大学 卒業 |
| 1943年 | 名古屋帝国大学医学部 助教授 |
| 1944年 | 名古屋女子医学専門学校 教授 |
| 1947年 | 名古屋女子医科大学 教授 |
| 1950年 | 名古屋市立大学医学部 教授 |
| 1958年 | 名古屋大学医学部病理学第二講座 教授 |
| 1974年 | 名古屋大学医学部長 |
| 1977年 | 名古屋大学 退官 |
| 1977年 | 愛知医科大学教授 愛知医科大学学長を歴任 |
| 2006年6月7日 | 逝去 |

1958年名古屋市立大学医学部教授から名古屋大学医学部教授に就任。研究としては肺がんの研究と老化の基礎的研究という2つの柱を推進する。とくに老化の研究では老若ラットを手術的に吻合するいわゆるパラビオーゼラットの長期観察という極めてユニークで困難な実験を遂行し、老化の促進と抑制に働く細胞性、体液性因子の解明に重要な方法論を確立した。愛知医科大学に加齢医科学研究所を設立する。第8回肺癌学会会長、第63回日本病理学会総会会長、勲二等旭日重光章

［ 受賞 ］

中日文化賞（1970年）、ベルツ賞（1973年）、日本医師会医学賞（1983年）



## 大島 福造

おおしま ふくぞう

**昭和14年就任（1939～1958年）**

| | |
|---|---|
| 1895年8月 | 名古屋に生まれる |
| 1917年 | 県立愛知医科大学 卒業 |
| 1925年 | 同上 助教授 |
| 1927年 | ドイツフライブルク大学に留学 |
| 1939年 | 名古屋帝国大学医学部病理学第二講座 教授 |
| 1958年 | 名古屋大学医学部 退官 |
| | 退官後、関西医科大学、藤田保健衛生大学教授として教鞭をとる |
| 1977年11月31日 | 逝去 |

京都大学から移入された家鶏肉腫を中心とした研究を展開し、特に肉腫ウィルスの標的細胞が創傷治癒における再生増殖細胞であることを実験的に証明した研究が特記される。ドイツ留学から帰国後、林直助、木村哲二時代の教室運営を助け、さらに戦中、戦後の困難な時代に教室を主宰した。空襲により教室の建物も全焼し、各種腫瘍系統もすべて断絶してしまうという困難な状況の中で、多くの有能な人材を世に送り出した。第39回日本病理学会総会会長、第13回日本癌学会総会会長

［ 受賞 ］

ウィルヒョウ山極賞（1927年）、中日文化賞（1957年）